

まえがき

昭和六十年頃、仕事で品川近辺を歩いていました。八ツ山通りを品川に向かって北品川一丁目の交差点から旧東海道に登る小さな坂道があり、ふと見上げますと何と荒井屋という鰻屋さんがあるじゃないですか。戦前からと思われる古い建物で、時間も午前十時過ぎでしたから営業しているのかいないのか良く判りませんでしたけれども、これがあの「居残り佐平次」や「ちきり伊勢屋」に出て来る荒井屋に相違ない、と確信させる何かがありました。その場所は土蔵相撲の跡からも歩いて二、三分の所でありましたので、たちまち当時に戻り、そこから佐平次が鼻歌を歌いながら出て来るような気分になり、めまいすら覚えたほどでした。何時かこの荒井屋の鰻を食ってやろうと思いついたのですが、転勤でそれも果たせないままとなつてしまいました。

時は流れ、最近時間にゆとりが出来ましたので、旧品川宿を訪れてみましたが、記憶の場所に荒井屋は見付かりませんでした。その時そう言えば当時の人は徒歩で移動した訳ですから、家を出てからここまでどのくらいの時間がかかったのだろう。嘶に出て来るそこここは今の何処だろう、どうなっているのだろう。「芝浜」って何処なんだろう。「らくだ」のとむらいの道行きは何処を通ったんだろう、など色々興味湧いてまいりまして、ひとつ現地を自前の足で歩いてみようと思いついた次第です。行ってみて改めて思った事は、江戸の頃は想像以上に狭い範囲で生活が完結していた点であります。まあ、そりゃそうで、思い立って吉原にでも行

こうか、というのに三時間も四時間も掛けていたら、いい加減疲れちゃいますし、気持ちも萎えてしまうもんでしよう。

地名の出て来る落語は思いの外少ないもので、ここに挙げました三十六席はまあ代表的なものと思われます。色々とお意見もございませうが、そんなにお時間は取らせませんで、お付き合ひ頂ければ幸いです。

なお、お断の順は便宜上第二十八席の「ちきり伊勢屋」までは、講談社文庫『古典落語』全六巻、興津要編に倣っておりますが、以下は順不同であります。

目次

まえがき

一	明烏 <small>あけがらす</small> そんなことをしてごらんさい、大門でとめられる。…………… 9
二	長屋の花見 <small>ながや はなみ</small> 良い事がありますよ、酒柱が立っている。…………… 19
三	湯屋番 <small>ゆやばん</small> それじゃ今のは空癪か。うれしゅうござんす番頭さん。…………… 23
四	恪氣の火の玉 <small>りんき ひ たま</small> あたしのじゃ、おいしくありますまい、ふん。…………… 30
五	三方一両損 <small>さんぼういちりょうぞん</small> おおかあくわねえ、たったいちせん。…………… 35
六	たがや あなた、言った後で私の後に隠れちゃ嫌だよ。…………… 39
七	居残り佐平次 <small>いのこ さへいじ</small> 人殺しこそせぬものの、野盗、かつ裂き、家尻切り、悪事の限りをつくした身です。…………… 43
八	目黒のさんま <small>めぐろ</small> 日本橋の河岸で仕入れた。それはいかん。…………… 52
九	小言幸兵衛 <small>こことこうべえ</small> 亡き女房のかたき、そこになおれ。…………… 56

十	宿屋の富	金が増えるばかりで嫌になっちゃう。……	63
十一	芝浜	財布を拾ったのが夢で、騒いだのが本当。……	69
十二	御慶	恵方まいるの帰りが。……	76
十三	崇徳院	割れても末に逢わんとぞ思う。……	84
十四	大山詣り	お毛がなくなつてお目出たい。……	89
十五	らくだ	手前の尻上げてどうすんだ、徳利の尻上げろってんだ。……	95
十六	子別れ	この玄能で叩くのは、お父つあんのお仕置きと同じこと。……	102
十七	堀の内	お前のそそっかしいのは、信心でもしなきゃ直らない。……	111
十八	おせつ徳二郎	お嬢さんの癩は徳どんに限る。……	120
十九	宮戸川	こちらが日本橋、そちらが神田、この線から入っちゃいけませんよ。……	129
二十	文違い	要らねえよ、そんな事言うなら、この金は要らねえよ。……	138
二十一	王子の狐	おろちだろが、鬼だろが、天狗だろが、扇屋にこの源公がいるかぎり。……	148
二十二	品川心中	喉は止そうよ、急所だぜ。……	156
二十三	素人鰻	前に回つて、鰻に聞いてくれ。……	165
二十四	付き馬	急なことでびっくりしたでしょう、私が引き受けたからには安心しなさい。……	171
二十五	唐茄子屋政談	お天道様と米の飯はついて廻るから。……	178
二十六	百川	お申し出の件は重々承知いたしました。……	185
二十七	甲府い	善吉に次第も五第も有るか。……	191
二十八	ちきり伊勢屋	気の毒だが天庭に黒気が現われている。……	199
二十九	今戸の狐	妻は千住に限る。……	207
三十	文七元結	金比羅様でも、お不動様でもお前の好きなので良いから毎朝祈つてやつてくれ。……	213
三十一	佃祭	女の人だから助けたんです。男の人だったら放り込んでます。……	223
三十二	井戸の茶碗	刀にかけても受取らせる。……	232
三十三	鰻沢	旅の人、忘れ物だよ、待ちやがれ。……	239
三十四	黄金餅	金魚、金魚、みい金魚、はなの金魚は良い金魚。……	247
三十五	蔵前駕籠	まるで女郎買いの決死隊だね。……	254
三十六	柳田格之進	きぬは武士の娘でございます。……	259

一 明烏

—— そんなことをしてごらんなさい、大門でとめられる。

日本橋の大店の若旦那、年頃なのに堅いばかりであります。これを心配した親父が町内の遊び人に、廓遊びの手ほどきを依頼いたしました。最初は泣いて嫌がっていた若旦那も、一晩明けましたら、

「へっ、へっ、へっ、どうも結構なことで」

と様変わりでありました、という一席。

若旦那道楽入門編の名作であります。ちなみにこれに続くところの道楽真最中編といたしましては「六尺棒」「干物箱」「羽織の遊び」。勘当編といたしましては、「湯屋番」「船徳」「唐茄子屋」「火事息子」といったあたりでしょうか。

道楽と言いますと以前は男の専売特許でありましたが、最近は男女平等の世の中となりましたが、誠に結構な事があります。しかしその中身となりますと、「飲む」「打つ」「買う」の三拍子、三ドラ煩惱は男女不問不変であります。その程度の差こそあれ、大旨この三つのどれかに引き寄せられてしましますが、内には三拍子揃ったまるでワルツのような方もいらっしゃるやいまして体の休まる時がございません。何れにしろこの道に嵌ったきっかけは、と申しますと偉人の伝記を読んで感激したとか、教科書に出ていたのを実践したとか、尊い先生の教えに導かれて、とかいった事では決してありません。訳知り顔の先輩、ちよつと

ませた同級生などから、「マア、マア、マア、マア」とか何とか言われ最初は嫌々、ちよつと興味本位の悪い物見たさで付き合つてみて、気が付けばあつという間の奈落の底へのローリングストーンであります。立身出世に役に立つ有り難い教へには耳を貸さない手合いも、こちらの方はきつかけさえつければ目を見張るばかりに開花してしまいますのも不思議と言へば不思議であります、困つたもんであります。

初午はつなと言いますから旧暦正月の初めの午の日新暦二月の下旬であります。若旦那が帰つてまいりますと晩飯のお膳が出来ているというところから夕暮れ時でしょう。この頃は寒い冬もようやく終わりを迎えようとする頃で、日によりましては思いもかけぬ暖かい風が梅の香を運び、何とはなしに心浮き立つ早春の候です。この噺も誰にでも平等にあつた青春時代の一コマなのでしょうか。

日本橋田所町日向屋の若旦那時次郎、今年十九の年頃なのに堅いばかりで、それはそれで親にしてみれば心配なものであります。

「遅いつて心配する事は無い、いい若い者がたまに遅く帰るぐらいじゃなきやいけない。あいつのように毎日部屋に籠つて本ばかり読んで、それも面白くもない子曰しのたまはく、子曰はくつて、火の玉食つて青白い顔してたんじゃ何やつてんだか訳がわかんない」

と親父が言っているところに若旦那が帰つてまいりました。何処に行つていたのかと聞きますと、お稲荷さんの初午で煮しめが旨かつたのでおこわを三膳頂いて、子供達と太鼓をたたいて遊んでいたとの事。

「今年十九になる人間のやる事じゃないよ。お前は当家の跡取り息子、この身代を継いだ時には旦那衆とあそこのお茶屋さんではあんな旨い物を食わせませぬ。あそここの料理屋さんはこんな工合いですぐらい話せ

なきや商売の切先が鈍つていけないんだがねえ」

「そう言えば帰りしな源兵衛さんと太助さんに会いまして、たいそう御利益のあるお稲荷さんに御参詣に誘われましたが」

「ふーん、お稲荷さんでどっちの方角だつて言つてた」

「何でも浅草の観音様の裏手の方だそうですが」

「ああつ、あそこか。あそこのお稲荷さんはいそが御利益がある。何たつて日本一だ。是非行つて来なさい。身みなり形が悪いと御利益が薄いから結城のお召しにでも着替えて、お賽銭が少ないと御利益も少ないからたつぷり持つて」

と送り出しました。これは親父が源兵衛と太助に息子に廓遊びの一つも仕込んでやつて欲しいと、かねて頼んでおいていたからの事であります。三人で吉原への道行きとなりますが、途中で中継ぎといつて一杯やります。その時も手を打つて勘定、などというのは野暮、お前がはばかりに行くふりをしてさつと済ましてしまえ、あの連中から割り前など取つたら何といつても町内の札付きの悪だから後が怖い、と親父の入れ知恵までばらしてしましますが、こんなものにひるむ二人ではありません。

引手茶屋(注一)を巫女の家、女将を巫女頭とごまかして何とか登楼してひきつけ部屋(注二)に入りますが、廊下を文金、赤熊しやくま、立兵庫たてひょうこなんて髪に結つた花魁が通ります。部屋着を着て左で張り肘、右手で褌つまを取りまして

(注一) 客を妓楼に案内する茶屋。大店はかならずここを通して登楼した。

(注二) 客と遊女が酒宴をする部屋。



どんな堅物でもここまで来れば妓楼と知れます。(楼内慰安の図 青楼年中行事)

厚い草履で、パターン、パターンと渡って行きます。ここまで来ればどんな堅物だってここが女郎屋と知

れます。一人泣き出して帰るとぐずる若旦那をしばらくは何とかなだめようとしていた二人ですが、若旦那何としても聞き入れません。帰る、帰るの一点張りであります。とうとう業を煮した源兵衛が、

「坊っちゃん、そんなに帰りたいのなら帰りゃ良いじゃないですか。でもね、坊っちゃんは御存知ないかもしれないが、この吉原には吉原の法つてものがある。吉原の規則ですから教えてあげましょう。柳のところに大門おおもんがあつたでしょう。あそこにひげを生じた怖いおじさんが四、五人居たんですよ。そこでちゃんと帳面をつけていてあの三人はどこに行った、あの四人よつたりはどこに寄つて何時帰つたと、ちゃんと調べているんです。今坊っちゃんが一人で帰つたら怪しい奴と、ふんじばつてあたしらが帰るまでとめておくことになつてんですから。なあ、そうだよなあ」

すかさず太助も相槌を打ち、

「そおだとも」

「私も意固地だから、二月も三月も居続けますからね。そうしたら坊っちゃんはずうーっと大門にとめられたまんまですからね、なあー」

追い討ちをかける太助です。

「そおさ、二年も三年もとめられている奴なんかざらに居る。長いのは元禄時代からとめられている」

と脅かされた若旦那とうとう相方、かむろ、芸者、太鼓持ちをあげての宴会が終わるまでは付き合うこととなり、座敷の隅で涙ぐみながらじつとしておりました。若旦那の相方は今年十八の絶世の美女、浦里花魁であります。そんな初心な人ならわちきの方がついてみたい、と花魁からのお見立てでありました。

何だかんだと言ってもそこは餅は餅屋でございます。

「嫌だ、助けて下さい、瘡かさを注三かく、殺される、二宮尊徳はこんな事しない、お父おとっあん、おっ母さん」

と泣きわめく若旦那を何とかなだめすかして浦里花魁の部屋に押し込んでしまいました。

さて翌朝、見事に振られました二人が、若旦那は何時帰つたのかと若い衆に聞きましたら、何と未だ帰っていないとの事であります。あんな様子じゃ振られてどうせ一人寝であろうと浦里花魁の部屋に行き、廊下から次の間を通つて襖をがらりと開けてみますと、何と二人してねや閨ねやの中であります。あきれた二人に若旦那顔を真っ赤にしながらも、

「どうも、結構なお籠りで、へっへっ」

「ああそうですか、そりゃ良かったですね。さあ支度が出来ましたから帰りますよ」

「若旦那、お連れさんがお支度が出来たそうですから、おきなまし」

「坊っちゃん、あんたも凶々しいね。花魁だつてこう言つてるんだから起きたらどうです」

「花魁は、口ではこう言つてるんですが、足であたしのことをぎゅつと押さえていて……、苦しくつて……」

馬鹿馬鹿しくつて居たたまれない二人、

「坊っちゃんはどうせ暇な身、私らは仕事がありますから帰ります。一人で居続けてなさい」

「帰れるものな帰つてごらんなさい。大門でとめられる」

八代目柱文楽が逸品、と呼ばれた一席であります。三代目古今亭志ん朝も結構な出来であります。甲乙付け難く、ここまでまいりますともう好きかどうか、といった域なのでしょう。

さて、若旦那の住まいが日本橋田所町ですが現在の日本橋堀留町二丁目あたりでございます。こちらから吉原までの道程は、小伝馬町から江戸通りにて馬喰町、浅草橋から蔵前を通って浅草へ、馬道通りから土手通り、といった見当でございますか。

田所町のあったのは丁度人形町と小伝馬町の中間で、明暦三年（一六五七）に新吉原が出来るまでの元吉原が近くでありました。現在も日本橋の中心とも言える中央通り、昭和通り近辺から道一本入っただけですが、大分その趣を異にしております。近代的なビルもあれば、その谷間に昔ながらの小さな民家もそのままに取り残されて居る下町、といった風情であります。人形町から小伝馬町までの人形町通りも緑豊かで、そ

こかしこに小さなお稲荷さんがあります。若旦那がおこわを三膳頂いたのは、三光稲荷か、橘稲荷、あるいは杉ノ森（相森）稲荷あたりであったでしょう。「伊勢屋稲荷に犬の糞」と言われたほど江戸にはお稲荷さんが多かったのも、京都の伏見大社を元締とする商売の神様という事からして上方の商家の江戸進出と不可分であるのでしょうか、とにかくこの辺もお稲荷さんは確かに多くあります。お富さんの玄治店もこのあたりですが、今でもちよつと入った裏道に由緒ありげな料亭などが散在し、なるほど葎町の花街はこのあたりであったのかと納得いたします。

田所町から北西に四、五分行けば小伝馬町でそこを右に曲がって江戸通り、浅草までは一本道であります。小伝馬町から十分足らず、町並みに商店が増えてまいりますと横山町から馬喰町、繊維問屋街となります。大小の布地問屋が軒を連ね、勿論小売りもやっております。エトワール海渡、などが有名です。さらに北進して神田川に当たります。ここを渡るのが浅草橋、今度は人形、玩具の町となります。吉徳、久月、真太呂といったところが有名ですが、昨今は少子化の影響がこの街にも来ておりますようです。

浅草橋の町を過ぎて二十分ほど、妙にがらんとした感じとなりますが、考えてみれば蔵前で、倉庫街でありましたので今でも何となく殺風景なのも無理からぬところなのでしょう。駒形のどじょう屋、鰻の前川、むぎとろ屋なんかが見えて来て何となくほっとしてきますと吾妻橋西詰めであります。神谷バーの前にとどろき着きましたのが日本橋を出まして一時間と十五分ぐらいでありました。

中継ぎ、といって途中で一杯遣ると嘶の中になりましたが、やはり一時間ちよつと歩き通しですと昔の人でも疲れるようでして、ここらで一休みして景気を付けて中に繰り込みたいのももつともなことで得心いたします。ここからは観音様のお詣りをはしよって馬道から土手通り、急げば二十分、ゆっくり行って



日本堤（土手通り）から大門に向かう五十間道。昔どおりのS字型となっている。左測ガソリンスタンド前の柳が「見返り柳」。台東区千束4-7。

も三十分とはかからず見返り柳、大門となります。今では言い訳みたいな柳が一本と石碑があり、ガソリンスタンドが賑やかに営業しておりますが、土手通りに残っております明治以前の創業と思われれます天ぷら屋、そば屋、馬肉屋の古い商家が往時をしのばせます。

見返り柳から大門までが距離にして五十間、仲之町を通りますと、角海老、三浦屋と言う屋号が残っておりますが江戸の頃から続いた店なのかは存じません。京一、京二、江戸一、江戸二といったあたりは商店会の名前として残っておりますようで、祭礼の提灯にてそれが知れます。この一角千束四丁目は新規に風俗が開業出来る稀少な場所であるそうでございます。

(注四) 吉原帰りの客がここまで来ると思わず廓を振り返ることから。

二 長屋の花見

—— 良い事がありますよ、酒柱が立っている。

「長屋中歯を食いしぼる花見かな」

二代目蝶花楼馬楽の句が全編の基調となっている一席でございます。

月番が大屋さんから店子みんなを集めてくれとの事。何しろ誰一人として店賃なんて払っていない。十一年前に払ったきりから、店賃なんて知らない奴、店賃とは大家から貰うものと思っっているのか、親父の遺言で先代から払ってないやら、おふくろの背中に居るころ払ったはずだ、なんて連中ばかり。

店立てを食らわされるのかと心配しつつ、大家さんとお目通り。ところが大家さん、あんなうす汚い長屋だから店賃なんて気にしていない、今日来て貰ったのは陽気に花見に出掛けようとの相談。酒、さかなは用意した、と大家さん。しかし店賃なんて気にしないから大家さんも金は無い。三本の一升壺の中味は番茶を煮出して水で割り、大根のお香こを蒲鉾に、たくあんを玉子焼に見立てての花見行。毛氈の代わりのむしろをかつぎ歩く姿は乞食の行列か、猫の死んだのを捨てに行くようであります。何とか上野の山に来て酒盛りごっこを始めるが、歯が悪いから玉子焼は食べられないとか、音を出さずに蒲鉾を食うのが大変だとか。御指名で今月と来月の月番が酔ったふりで茶癖悪くからむ姿に大家さん大喜びであります。

本書の製作にあたり、以下の文献を参考にいたしました。

- 古典落語全六巻 講談社文庫 興津要編
落語事典 増補改訂新版 東大落語会編 青蛙房
東京落語散歩 吉田章一 青蛙房
切絵図現代図で歩く江戸東京散歩 人文社
江戸・東京早まわり歴史散歩 黒田浩司 学生社
江戸東京事典 小木新造他編 三省堂
びんぼう自慢 古今亭志ん生 毎日新聞社
古今亭志ん生落語ベスト集 保田武宏 日本コロムビア
古今亭志ん朝新選独演会 榎本滋民 ソニーファミリークラブ
NHK落語名人選
日本人物語 井上靖他監修 毎日新聞社
大江戸ものしり図鑑 主婦と生活社 花咲一男監修
川柳江戸吉原図絵 花咲一男 三樹書房
江戸入浴百姿 花咲一男 三樹書房
江戸行商百姿 花咲一男 三樹書房
江戸店舗図譜 林美一 三樹書房

本文中の図版については、花咲一男氏のご好意により、その多くを
所有の資料により構成いたしました。ここに厚く御礼申し上げます。

林 秀年（はやし ひでとし）

昭和二十四年、疎開先の埼玉県浦和市生まれ。
昭和三十年、東京都渋谷区に転居。
明治大学法学部卒業後、昭和五十二年より平成
十六年まで二十七年間、信販会社に勤務。
落語との出会いは小学生の頃、年長の従兄に連
れられて入った新宿末広亭で、ここを皮切りに、
日比谷の東宝名人会、東横落語などに通うこと
で、落語の魅力を知り、強い関心を抱くようにな
る。
現在は、飲食、睡眠、放浪、妄想を趣味とし、
無宗教、無思想（無念無想）を旨とした生活を
送っている。

落語で辿る江戸・東京 三十六席。
隠居の散歩 居候の昼寝

著者 林 秀年
発行者 小林謙一
発行所 三樹書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一―三〇
電話 〇三（三二九五）五三九八
<http://www.mikipress.com>

※無断転載禁止

印刷所・製本 中央精版印刷

※本書の一部あるいは写真などを無断で複写・複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利の侵害になります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版權管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。